



撮影：山田新治郎(表紙、並びに当ページ)

日本二十六聖人記念館

長崎県長崎市

強い通り雨が去って、薄日の差す初夏の午後、長崎市の西坂公園で長身の若い外国人青年が、記念碑を真つ直ぐ見つめたあとゆつくりと頭を下げた。その静謐な祈りが心を打つ。記念碑は、長崎駅が見える小高い丘の上の「日本二十六聖人記念館」の前に立つ。二十六聖人は、キリシタン迫害の歴史のなかで、一五九七年、豊臣秀吉の命により処刑された二十六人のカトリック信者のこと。記念碑の場所が殉教の地だった。巨大なコンクリートの壁に等身大の二十六聖人が彫刻されたこの記念碑は、日本を代表する彫刻家、舟越保武によって制作された。

この記念碑と後方の記念館は「殉教の橋」で結ばれる。聖人二十六人は、京都、大阪などで捕らえられ、処刑地の長崎まで歩くことを強いられた。その苦しい道のりがこの橋なのである。記念館はイエズス会によって建てられた。設計は今井兼次。建築家アントニ・ガウディを日本に紹介したことで知られる。隣接して建つ「日本二十六聖人記念聖堂・聖フィリッポ教会」も今井の設計で、双塔がガウディ設計のサグラダ・ファミリアを彷彿とさせる。記念館、教会ともに鉄筋コンクリート造で、一九六二年に竣工した。

記念館の内部は、ステンドグラスからの柔らかな光が射す厳かな空間で、殉教者のメッセージを伝えることなどを目的に展示物が並ぶ。外観は、入口となる南面の壁がコンクリートの縦ルーバー、木造の斜め格子、石を貼ったコンクリートと多彩な表情を見せる。東西の壁は、ほぼ全面に陶磁器を使った美しいモザイクがデザインされている。これを今井はフェニックス・モザイクと呼び、聖人が歩いた各地の陶磁器などを集めて、壁一面のモザイクとすることで不死鳥のような生命力を与えた。モザイクには不思議な力が宿っているようだった。



聖フィリッポ教会の双塔は、日本二十六聖人記念館の外壁同様、聖人が辿った道のりの工房でつくられた陶磁器などを埋め込んでいる。デザインは、設計者・今井兼次の敬愛したアントニ・ガウディへのオマージュと言える。双塔のほか内部の窓やレリーフ、ノアの方舟の船底を想起させる聖堂の木製天井など、至る所に聖人への今井の祈りが散りばめられている。